

令和7年（2025年）12月8日

横須賀市教育委員会
教育長 新倉 聡 様

学力向上推進委員会
委員長 笠原 陽子

現行プランの成果と課題を踏まえた次期「横須賀市学力向上推進プラン」
（令和8年度から令和11年度）において目指すべき「学力」と、
新たな重点目標及びその指標について（答申）

本年7月23日に、横須賀市教育委員会から学力向上推進委員会に対して諮問された内容は、次のとおりであった。

現行プランの成果と課題を踏まえ、令和8年度から令和11年度までの4か
年を計画期間とする次期プランを策定するにあたり、①今後、本市が目指すべ
き「学力」とはどのようなものを明確にするとともに、②新たな重点目標の
設定及び③次期プランの進捗管理に相応しい指標について、貴委員会の専門的
かつ幅広い知見からご助言いただきたく、ここに諮問いたします。

そこで本委員会では、これまでの目標の達成状況を踏まえ、横須賀市が目指すべ
き「学力」や次期「横須賀市学力向上推進プラン」（令和8年度から令和11年度）
（以下、「次期プラン」とする）に関する重点目標及びその指標の方向性について多
角的に協議した。

協議の中心は、「学校はどのような役割を果たすべきで、どのような授業の在り
方を目指していけばよいか」（一方で、「家庭」「地域」の在り方についても言及した）、
「資質・能力を育む授業づくりを軸にしながら、学校としてどのように組織し、授
業改善（学校改善）につなげていけばよいか」という問いに迫るものであった。

こうした協議を踏まえ、諮問された3つの事項について、次のようにまとめた。

1 横須賀市が目指すべき「学力」について

これまでは、「学力」を教科内容（国語、算数・数学等）に即して形成される
認知的な能力（個別の知識や技能の習得状況等）に限定しがちであった。今後は、
予測困難な時代である今日において、生成AIなど多様な情報技術が融合する現
代のデジタル化社会を生きる児童生徒の姿もイメージし、横須賀市が目指すべき
「学力」を捉えなおす必要がある。そこで、児童生徒の実態をより総合的に捉え、
必要な知識やスキル、情意（態度及び価値観）を要素とした「資質・能力」ベー
スの考え方に基づいて、非認知的な要素（コミュニケーションや協働等の社会的

スキル、自律性、協調性、責任感等の人格的特性・態度等）も含め、教科横断的な資質・能力の育成と捉えることが望ましいと考える。

また、次期プランを推進する上での基本的な考え方は、「学校・家庭・地域が三位一体となって取り組む」ことで、児童生徒の資質・能力を育成し、横須賀市が目指す教育の姿の実現を目指すことが大切である。その際、学校は「授業において児童生徒が学ぶ楽しさを実感できるようにすること」「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を通じて資質・能力を育成すること」、家庭は「これからの社会を生きていく上で必要な生活や感情の土台をつくること」、地域は「児童生徒が具体的に社会とつながる場として、学びを実践する機会やきっかけをつくること」を重視して取り組むこととする。そして、三位一体となって取り組むためのキーワードを「つなげる・つながる」とし、教育行政がその全体をサポートすることが重要である。

2 新たな重点目標の設定について

次期プランの新たな重点目標を設定する上での方向性については、次の4点とする。

- (1) 共に学び合う集団の育成を図る
- (2) 粘り強く学ぶ力の育成を図る
- (3) 社会とつながる力の育成を図る
- (4) 生活や学びの土台となる力の育成を図る

(1) 及び (2) については、これまでの「横須賀市学力向上推進プラン」の成果と課題を具体的に踏襲するものであり、児童生徒が学校において友人や教師などの他者と学ぶことのよさを実感できるようにするとともに、個で学ぶ場面においても、試行錯誤を繰り返すことや、最後まで課題に取り組めることを目指すものである。

(3) については、児童生徒の学びが学校の中だけに留まらず、社会や生活とつながることを目指すものである。また、生成 AI など多様な情報技術が融合する現代のデジタル化社会を生きる児童生徒の姿もイメージする必要がある。学校教育においても、情報を適切に選択したり、一人一台端末等を活用して自ら発信したりするなど、情報活用能力の視点からも学びを豊かにすることを意識しなければならない。あわせて、「社会とつながる力」の育成は、学校教育だけで実現するものではなく、学校と地域が積極的に情報を共有し、デジタル化された情報だけではなく、地域の人や文化と直接触れ合うことによって得られる豊かな学びが実現できるようにしたい。

(4) については、様々な体験等を通して、実感を伴って豊かに経験することの価値を、児童生徒を取り巻く大人が理解し、児童生徒が豊かに学び、生活することを目指すものである。「生活や学びの土台となる力」を育成するために大切なことは、子どもの言葉を肯定的に受け止めたり、共感的な言葉をかけたりするなど、子どもに寄り添い励ますことであり、こうしたコミュニケーションが子ども

の自尊心や、学びの土台を育成することにつながる。そして、子どもがどこでも安心して健やかに過ごせるように、「子どもの成長を支え合う」という理念を共有し、それぞれが連携しながら協力し合う姿勢が、児童生徒の学びを豊かにする上で不可欠である。

※なお、本答申では、基本的に「児童生徒」と表記しているが、家庭での姿をイメージする際には「子ども」という表記を用いた。

3 次期プランの進捗管理に相応しい指標について

新たに掲げる4つの目標の到達度を測り、適切に進捗管理を行うためには、全市的な質問調査を行い、児童生徒が学びに対してどのような意識を持っているのかを把握するとともに、従前どおり全国学力・学習状況調査における教科調査の結果と合わせて、非認知的な要素を含めた児童生徒の資質・能力が育成されているのかについて、多面的・多角的に分析することが大切である。

これまでの「横須賀市学力向上推進プラン」では、仲間と協働しながら時間をかけて試行錯誤しながら学習するというプロセスを重視するとともに、児童生徒個人に粘り強く学ぶ力が身に付くことによって、教科調査の結果が上昇することを目指してきたが、その指標は、内容や経年変化の見取り方などによっては、発達の段階や地域差などが影響し、教科調査の結果との関係性を分析することが困難だった。

この度、学力を「知識・スキル、情意を要素とした教科横断的な資質・能力の育成」と改めて整理し、新たな重点目標を設定する上での4つの方向性を示したが、この4つは相互に関連し合い、児童生徒の資質・能力を多面的・多角的に育成するという意図がある。4つの方向性に関する状況を適切に把握するためには、児童生徒が学びに対してどのような意識を持っているのかを総合的に捉えられる質問調査を行うとともに、全国学力・学習状況調査における教科調査の結果と合わせて多面的・多角的に分析することが望ましいと考える。

なお、各目標の進捗管理をするための指標については、次に例示する。

(1) 「共に学び合う集団の育成を図る」に対する指標

共に学び合う集団の育成は、児童生徒が豊かに学ぶために欠かせないものである。互いに尊重し合い、協働的に学ぶことで、一人では得られないことを感じ取ったり、考えたりすることができる。

また、多様な考え方や感じ方などに触れ、みんなで問題を解決する経験は、社会を生きる上での土台にもなる。心理的安全性が担保された環境で、安心して意見を交わせることは、児童生徒の学習意欲や他者と協力する姿勢にもつながる。

このような「共に学び合う集団」であるかどうかを把握するためには、次のような質問項目が有効であると考ええる。

- ・みんなで課題を解決する場面で、協力しようとしていますか。
- ・学校では、安心して自分の意見を言うことができますか。

- ・話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか。(参考：全国質問調査 35)
- ・友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか。(参考：全国質問調査 39)

(2) 「粘り強く学ぶ力の育成を図る」に対する指標

予測困難な時代である今日において、児童生徒一人ひとりに粘り強く学ぶ力を育成することは、横須賀市に限らず求められていることである。正解が多種である問題や、すぐに答えが出ない課題に直面する場面は、学校生活のみならず、日常生活においても多く存在する。簡単に諦めずに努力し続けたり、失敗をしてももう一度挑戦したり、自分なりに工夫したりしながら粘り強く学んでいく力は、児童生徒にとって重要な力となる。

児童生徒に「粘り強く学ぶ力」が育成されているかどうかを把握するためには、次のような質問項目が有効であると考ええる。

- ・難しい課題に対しても、挑戦して取り組もうとしていますか。
- ・分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか。(参考：全国質問調査 16)
- ・何かをできるようになるまで、時間がかかっても練習したり努力し続けたりした経験はありますか。

(3) 「社会とつながる力の育成を図る」に対する指標

小中学校において育成すべき「社会とつながる力」とは、学びを学校の中で完結させずに、生活に結び付ける力であり、児童生徒が将来社会に参画するために必要な力である。このような力は、生成 AI など多様な情報技術が融合する現代のデジタル化社会を生きる児童生徒にとって、ますます重要になる。また、必要な情報を見極め、自分の考えを分かりやすく発信する「情報活用能力」と「社会とつながる力」を組み合わせることで育てることは、児童生徒がこれからの社会をたくましく生き抜くために必要な取組である。

児童生徒に「社会とつながる力」が育成されているかどうかを把握するためには、次のような質問項目が有効であると考ええる。

- ・学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていますか。(参考：全国質問調査 33)
- ・自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。(参考：全国質問調査 40)
- ・地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。(参考：全国質問調査 27)

(4) 「生活や学びの土台となる力の育成を図る」に対する指標

生活や学びの土台となる力を小中学校で育成することは、児童生徒が安心して毎日を過ごし、主体的に学び、健やかに成長していくためにとっても大切であ

る。この土台となる力には、基本的な生活習慣の確立、基本的な対人関係づくり、学習意欲などが含まれる。学校・家庭・地域が三位一体となって子どもを見守り、共通の理念の基、共に取り組むことが重要で、この協力によって児童生徒が安心して豊かに学ぶことができる環境がつくられ、多様な価値観や実感を伴った経験を得ることができる。

児童生徒に「生活や学びの土台となる力」が育成されているかどうかを把握するためには、次のような質問項目が有効であると考えます。

- ・授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思いますか。(参考：全国質問調査 37)
- ・学んだことを生かして、人の役に立つ人間になりたいと思いますか。(参考：全国質問調査 11)
- ・あなたの周りの大人は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。(参考：全国質問調査 6)

次期プランの目標が達成され、横須賀市の教育がさらに充実するためには、学校・家庭・地域が連携し、それぞれが役割を果たすとともに、教育行政がこれを適切にサポートすることが不可欠である。横須賀市教育委員会は、次期プランの目標達成のためには、「各学校」はどのように授業改善を行えばよいのか、「家庭」ではどのように子どもと向き合えばよいのか、「地域」と児童生徒の学びがどのようにつながればよいのか、などの視点でその具体を示す必要があるだろう。そして、学校・家庭・地域がつながり、それぞれの立場から児童生徒にとっての「豊かな学び」とはどのようなものかについて語り合える環境がつけられることを期待し、ここに答申する。